

A年特定14 マタイ14章22—33節

【直訳】

- 22 そして すぐに 彼は強いた
弟子たちが 乗り込むことを **舟へと**
そして 彼の先に行くことを 向こう岸へと、
あいだに 彼が去らせる 群衆たちを。
23 そして 去らせて 群衆たちを
彼は上った 山へと 独りで 祈るために。
だが夕方に なって 一人で 彼はいた そこに。
- 24 だが **舟**は すでに スタディオン 多くの 地から 離れていた
ひどく苦しめられつつ 波によって、 なぜならあつた逆で 風が。
25 だが第四の 夜警時間に 夜の
彼は来た 彼らの方に 歩きつつ 海の上を。
26 だが弟子たちは 見て 彼が 海の上に 歩くのを
怖じ感った 言いつつ 次のことを 「幽霊で ある」、
そして 恐れから 彼らは叫んだ。
27 だがすぐに 語った 「イエスは」 彼らに 言いつつ、
「勇気を出しなさい、 私で ある。 恐れているな」。
28 だが答えて 彼に ペトロは 言った、
「主よ、 もし あなたで あるなら、
命じてください 私が 行くことを あなたの方に 水の上を」。
29 だが彼は 言った、 「来なさい」。
そして 降りて **舟**から
ペトロは 歩いた 水の上を そして 来た イエスの方に。
30 だが見つつ 風を 「強い」 彼は恐れた、
そして 始めて 沈むことを 彼は叫んだ 言いつつ
「主よ、 救ってください 私を」。
31 だがすぐに イエスは 伸ばして 手を
つかんだ 彼を そして 言う 彼に、
「信仰の小さい者よ、 なぜ あなたは疑ったのか」。
32 そして 上がると 彼らが **舟へと** 弱まった風は。
33 だが舟の中の者たちは ひれ伏した 彼に 言いつつ、
「ほんとうに 神の 子で あなたはある」。

「新共同訳」

22 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。23 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。24 ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れたおちの逆風のために波に悩まされていた。25 夜が明けるところ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。26 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。27 イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」28 すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」29 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。30 しかし、強い風が気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。31 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。32 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。33 舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。

①構成

①a 第一段落（22—23節）

⑦ イエスは弟子たちを「舟へと」強いて乗り込ませ、群衆を解散させた後に、独りで「山へ」登る。イエスは山で祈り、夕方になっても一人でそこにいる。第一段落の舞台は「山」である。① 22節の「舟へと」は32節にも現れる。第一段落と第四段落は「舟へと乗り込む」と「舟へと上がる」によって対応している。但し、22—23節の舞台は「山」であり、32—33節の舞台は湖の上の「舟」である。「舟」という語は24・29節にも現れるから、四つの段落すべてに用いられていることになる。

①b 第二段落（24—27節）

⑦ 第二・第三段落にも「舟」という語は現れるが、32節に「舟へと上がる」とあるから、二つの段落の舞台は「舟」ではなく、「海（湖）」である。25・26節には「海の上」、28・29節には「水の上」という表現があるが、第一段落と第四段落には「海」「水」という語は現れない。このことから、第二・第三段落の舞台が「湖」であることは明らかである。

① 25節と29節には、「来た…の方に」という同じ表現が見られる。25節では、イエスが「海の上を」弟子の方に来るが、29節では、ペトロが「水の上を」イエスの方に来る。第二段落では、海の上を歩くイエスを見て、怖じ惑った弟子たちが「幽霊だ」と「恐れから叫んだ」。第三段落では、水の上を歩くペトロが、強い風を見て「恐れ、…叫んだ」と述べられている。このように、第二・第三段落には対応する表現が見られる。「風」もその一つであるが、この語は第四段落にも現れる。24節には弟子の乗る舟を苦しめる「逆風」、30節にはペトロに恐怖心を起こさせる「強い風」が現れ、32節では「風は弱まった」と述べられている。

①c 第三段落（28—31節）

⑦ 水の上を歩くペトロが登場する28—31節にあたる部分は、並行箇所マルコにはない。第二段落の最後には「勇気を出さない、私である、恐れているな」というイエスの言葉がある。直訳の「恐れているな」は「恐れているのをやめなさい」という意味である。このイエスの命

令に応じて、ペトロは「イエスの方へ、水の上を行くこと」を願う。

④ 第四段落（32―33節）

⑦ 舟を苦しめた「逆風」、ペトロを恐れさせた「強い風」は、イエスとペトロが舟に上がると、弱まる。イエスが共にいる「舟」は、イエスを神の子と告白する場となる。

② ひとりで山へ（22―23節）

⑧ マタイでは洗礼者ヨハネは天の国宣教の仲間として描かれている。そのヨハネの死を知らされたイエスは、いつかは自分も弟子と別れねばならないことを予感し、パンで群衆を養った（一四13―21）。それは、いつもイエスは共にいて、いのちの糧を与えることを弟子に教えるためである。他の並行箇所とは異なり、マタイではパンの出来事は「夕方」に起こったと明記されているが（一四15）、海の上をイエスが歩く出来事にも「夕方」（23節）が用いられている。聖書では、夜の闇は神の顕現への伏線となる。それで、マタイは「夕方」であったことをここでも明記する。

⑨ パンの出来事に続くこの場面では、イエスは弟子を「強いて」舟に乗せ、先に向こう岸へと行かせる。群衆を去らせた後、イエスはひとり山で祈っている。「山」は祈る場所、神と出会う場所である。モーセはひとりで山に登ったが、イエスもひとりで山に登る。マタイでは、イエスは「新しいモーセ」と見られている。

⑩ マタイの教会はさまざまな課題や争いにもまれて苦しんでいるが、その中であって、「私たちに、山に登って神と特別に親しく交わる人が降りて来て、共にいてくださる」という事実は大きな慰めになると同時に、信仰告白にもなったと思われる。山で神にひとり会ったモーセのように、山で神との交わりの時をもてるイエスだけが、苦しみの中にある弟子を救うことができる。

⑪ 四つの段落のいずれにも現れる「舟」は、象徴として解釈することもできる。その場合には、「舟」は教会を表し、嵐の海は教会に対して戦いを挑むカオス（神に敵対する混沌）の力を表す。もしこの「舟」が教会を表すのであれば、この箇所は初代教会の宣教生活を土台にして読むことが可能になる。宣教にはさまざまな困難がつきまとう。迫害があり、無理解があり、教会内に内紛が起こることもあっただろう。宣教がなかなか進まないという状況の中で、マタイは、イエスと共に生活していたときにガリラヤ湖で起こった出来事を思い起こし、それを福音として書き記したと考えることもできる。

③ 海の上を歩く（24―27節）

⑫ ① 「夜の第四の夜警時間」にイエスは弟子の方へ来た。ローマの習慣に従って、夕方6時から朝6時までを四等分して、夜警時間を表した。「夜の第四の夜警時間」は午前3時から6時を指している。明け方は神が救いの手を指し伸べる時刻である（イザ一七14。詩四六6参照）。

⑬ ② 「海」と直訳したのはギリシア語のサラッサである。「五千人に食べ物を与える」という奇跡物語は、荒れ野をさ迷うイスラエルに神がマナを与えたという出来事を踏まえている（出16章）。それに対応して、この箇所はイスラエルの民が紅海を渡った出来事を下敷きになっているのかもしれない（出一四13―31）。イエスが歩いた「湖」も、紅海の「海」もギリシア語では同じサラッサである。

⑭ ③ 旧約聖書では、「海」は神の創造の力に敵対する原初の水、混沌と結びついている。従って、象徴的には、「海」は神の力に敵対するあらゆる力を表すと見ることができる。「舟」によって表された教会は「海」の中を行く。神に敵対する力が猛威をふるう場が「海」であるから、舟はなか

なか進まないということが起こる。この「海」に対して、イエスがひとり登る「山」、祈りの場、神と出会う場が対置されている。

④ 神の力は旧約聖書では、カオス（混沌）の象徴である海を支配する力と考えられている。神は最初の海を分けて大地を創造し（詩二四2）、紅海を分けて民を渡らせる。湖の上で逆風に漕ぎ悩む弟子たちの姿は、詩編やヨナ書に描かれた船乗りたちの苦難を思い出させる（詩一〇七23—32、ヨナ一1—16）。まさにそうした苦難の中で、彼らは海を静める主ヤーウエの力の大きさを体験する。紅海をイスラエルの民が渡るといふ出来事が起こった時刻もほぼ、イエスが湖の上を歩いた「第四の夜警時間」である（出一四24 a「朝の見張りのころ」）。湖の上でイエスは、海の高波を踏み砕き（ヨブ九8 b）、水の中を通るときも共にいると約束する主の姿を現す（イザ四三1—13参照）。

⑤ 歩くイエスを湖の上に見て、弟子は「幽霊だ」と叫ぶ。弟子の行動を描く26節と並行箇所のコ6章49—50節を比較すると、次のようになる。

怖じ感った、『幽霊である』と言いつつ、そして恐れから叫んだ（マタイ）。

幽霊だと思った、そして大声で叫んだ。なぜなら彼は彼を見た、そして怖じ感った（マルコ）。

マタイは「思った」という語を省き、「怖じ感った」を前に移動し、「恐れから」を加えている。こうして、「幽霊である」という叫びは弟子たちの恐れの大きさを表す叫びとなる。マタイが描く弟子たちは、判断力がないために「幽霊だ」と「思った」のではなく、恐怖のために判断力が狂い、「幽霊だ」と叫んでしまう。弟子たちを襲った恐怖の大きさがマタイでは強調されている。

⑥ 「勇気を出す」と直訳した動詞は、名詞サルソス（勇気）からの派生語である。恐れや不安がなく「元気でいる・安心して」を意味する。新約聖書の7回の用例はいずれも命令形で、恐れや不安にとらわれた者を慰めたり、励ますイエスの言葉に使われる。ファラオの軍隊が後ろに迫ったとき、怯えるイスラエルに（出一四13）、またシナイ山での神の顕現が、雷鳴や稲妻や角笛という恐れを引き起こすしと共に起こったときにも、モーセは民に同じ言葉を語っている（出二〇20）。

⑦ 恐れる弟子たちにイエスは「私である」と語る。申命記32章39節に見られるように、旧約聖書は神の顕現を表す定型句として「アニー・フー（私はそれである）」を用いる。この句は七十人訳旧約聖書では「エゴ・エイミ（私である）」と訳されているが、ここではこれが用いられている。これは、人に姿を顕した神が、自分が神であることを表明するための表現である（イザ四一4、四三10・13・25、四六4、四八12、五一12、五一6）。

④ 主よ、救ってください（28—31節）

⑧ a 「もしあなたであるなら」は二つの解釈が可能である。

- ① 「本当にあなたでしたら」という意味で、イエスかどうかを疑う言葉になる。
- ② 事実を仮定の形で述べているだけで、「あなたでしたか」という意味になる。

この条件文は単純な仮定を表す条件文であるので、仮定された事柄は事実であっても構わない。ここでは「あなたでしたか」の意味に取るのがよいかもしれない。それは、結びの33節で、弟子たちはイエスへの信仰を告白しており、また、マタイの描く弟子は「信仰がない」のではなく、「信仰が小さい」人々だからである。

⑤ 詩編69編2―3節に「神よ、わたしを救ってください。大水が喉元に達しました。わたしは深い沼にはまり込み、足がかりもありません。大水の深い底にまで沈み、奔流がわたしを押し流します」とある。ペトロの叫び、「主よ、救ってください」はこれによく似ている。詩編69編15節以下も参照。ペトロが叫ぶと、イエスはすぐに「手を伸ばして」ペトロをつかむ。「手を伸ばして」は、神が救いの働きを開始するときの所作である（出7:19、詩一四四7以下、一八17以下参照）。イエスは重い皮膚病の人に「手を差し伸べて」触れ、癒す（マタ8:3並行）。

⑥ ペトロを救い出したイエスは「なぜあなたは疑ったのか」と問う。「疑う」は「二重」を意味する副詞からの派生語である。ペトロの心は、イエスに従って水の上を歩きたいという願いと強い風への恐れに分かれている。この心が二つに分かれた状態が、「疑う」ということである。

⑤ あなたは神の子（32―33節）

⑦ イエスとペトロが舟に上がると、強い逆風は静まる。イエスが海の上を歩き、風を静めたのは、混沌を支配する神が共にいることを知らせ、イエスは「神の子」であると告白する信仰へと彼らを導くためである。心が二つに分かれる（疑う）ことがあっても、イエスがそのような「信仰の小さい者」を支えて、信仰告白を行わせる。

⑥ イエスが手を伸ばして支える

⑧ 「舟」が教会を表す象徴であるなら、逆風や荒波は教会の宣教を取り巻く困難を表している。宣教に向かった弟子たちは困難の中で行き場を失い、進むことも戻ることでもできない状況に立たされている。イエスの乗らない舟は、イエスのいない教会を表している。そこに「海」の上を歩くイエスが近づいて来るが、弟子は「幽霊だ」と怖じ惑う。彼らは、「幽霊だ」と口走るほどに恐れに取りつかれている。イエスが自分たちに近づいても、イエスと気づかず、恐れのみあまり叫ぶ弟子の信仰は小さく、弱いということだろう。しかし、イエスは彼らの弱い信仰を支えるため、「勇気を出しなさい。私である。恐れているのをやめなさい」と声をかけて、励ます。

⑨ モーセに導かれてイスラエルの民が紅海を渡った時、神が共にいて敵の力を打ち砕いたように、「海」の上を歩いて弟子に近づくイエスは、神が共にいることを示す。「私である」は自分が神であることを表明する表現であるから、逆風と荒波という困難の中にも神が共にいることをイエスは告げている。

⑩ ペトロはイエスの言葉に励まされ、水の上を歩こうとする。しかし、ペトロも他の弟子と同様に信仰が弱いために、強い風を見ると、恐れて、沈み始める。それでも、救いを求めて「叫ぶ」なら、イエスは手を差し伸べる。「救ってください」と叫ぶことが救いをもたらす。イエスの方へと歩み始めても、恐れがその歩みを頓挫させることがある。しかし、それは失敗ではない。イエスに叫んで救いを得ることへとつながっているからである。失敗があるとすれば、それはイエスの方へと歩み出さず、イエスの救いの手を求めないことである。

⑪ マルコは、「弟子たちは心の中で非常に驚いた。パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」と結んでいる（六51―52）。マルコの描く弟子は、理解力を欠いた人たちである。しかし、マタイでは、弟子はイエスにひれ伏し、イエスを「神の子」と告白する。マタイの描く弟子は、恐れのために判断が狂い、疑いを抱いてしまう「信仰の小さい者」である。イエスは弟子に手を伸ばし、彼らが信仰を告白することができるように支えている。この出来事を通して弟子たちは、恐れを打ち破り、救いに導くことのできる方はイエスだけだと確信する。